

川谷さんとの出会いは運命

私たちは中学の同級生で、結婚することを前提に、11年に関東から南三陸町へ戻ってきました。翔子夫より一足早い11年1月に帰郷しました。戻ってすぐに南三陸町観光協会へ就職しました。健爾当時の仕事の都合で、こちらに戻ってきたのは11年3月10日です。翔子震災当日は職場の事務所にいました。警報が鳴ったので、すぐに近くの高台へ避難。両親、祖母は自宅にいたので、助からないかもしれないと思いました。健爾義父母が経営する薬局で仕事をしています。実家の祖父母が心配になり、車で迎えに行きました。祖父はすでに避難していましたが、避難する途中、津波に流されましたが、祖母と二人何とか助かりました。翔子震災後、知り合いから「誰かのホームページに翔子ちゃんの写真が載っているよ」と教えてもらって、それが川谷さんのホームページでした。写真はすぐに保管場所を受け取ってきました。健爾写真が残っていると分かり、うれしかったです。今まで生きてきた証が残っていたのですから、残っていた写真2枚とも、川谷さんが見つけてくれたことに運命を感じています。川谷さんは私たちにとって特別な存在です。先日長男が1歳の誕生日を迎えました。誕生日を無事に迎えられた意味と重さを感じました。人とのつながりと、命の重さを忘れず、前を向いて進んでいきます。



小坂翔子さん(29)
小坂健爾さん(29)

南三陸町志津川在住

1986年南三陸町生まれ(2人共)。2013年7月に結婚、15年に第1子、真太郎くんが誕生。現在、翔子さんの両親、妹、祖父母と同居している。健爾さんの父、母、叔母、祖母は南方仮設住宅から復興を目指す。

ずっとそばに



1 川谷さんと小坂さん夫妻をつないだ写真。引越しの荷物に入っていた写真と、机に入れていた携帯がそばに落ちていた。あれだけの津波にもまれても、近くに落ちていたのは本当に偶然なのだろうか
2 健爾さんの思い出の品は2つしかない。ツーショット写真と、この写真付き手形色紙。これはツーショット写真より前に健爾さんの手元に戻った。昨年、この色紙も川谷さんが拾っていたことが分かった。この出会いは偶然ではなく、必然なのかもしれない
3 川谷さんは、小坂さん夫妻の結婚式に招待された。披露宴中は「みんなの笑顔」をカメラに収め続けた



「縁」に支えられる「支縁者」

川谷清一さん(59)
豊里町保手在住



1956年大阪府大阪市生まれ。東日本大震災以降、ボランティアとして被災地を1年間に10回訪問。津波で流された写真を回収し修復する「思い出探し隊」をはじめとした支援活動を行っている。2012年大阪府を退職し、同年4月登米市に移住。「年中夢中」が身上。

多くの人に「仕事辞めてまでこつちに来るなんてすごいですね」と言われます。私の父は55歳で亡くなり「父と同じ年齢までは生きたい」と思っていました。55歳で近づくにつれ「これまでと違う人生を歩みたい」と考えるようになり、そこで選んだのが被災地への移住でした。被災地での支援を決めたのには、もう一つ理由が。30年来の友人が津山町におり、震災後1カ月ほど連絡が取れず心配していました。ようやく連絡が取れたと思うと「仕事では毎日帰れていない」とのこと。「大変やなあ」と思っていたところに、4月7日の最大余震が発生。「東北へ行くしかない」と飛び出してき

震災後一年間は仕事をしながらのボランティアでした。主に、津波で流された写真の回収をしていました。その時に出会ったのが、小坂さんカップルの写真でした。そばに落ちていた携帯電話と並べ、シャッターを切りました。「生きてたらええな」と願いながら、写真と携帯を回収しました。その後登米町に移住し、とよまの秋祭り写真の展示会を開いたら「この写真、私です」と翔子さんが現れてびっくりしました。健爾さんも元気だと聞き安心しました。

私は、いろいろな縁を大切にしたいと思いきや、大きくなりました。それはこれからも変わりません。つながった人たちと共に、活動を続けていきます。

東日本大震災から5年。この期間を早かったと感じる人、そうではないという人もいるだろう。人によって感じ方は千差万別。復興についても同じだ。道路や交通網、水田の作付けなどの整備については、内陸も沿岸部も比較的速度スピードで進んでいる。登米市内ではほぼ復旧したといってもよいだろう。しかし、沿岸部の生活の根幹に関わる部分についてはまだまだだ。自分たちの家も、買い物する場所も、そのほとんどが仮設。さらに、そのまちの中でも差はあるだろう。

日本人は元来「縁」を大切にしている民族だ。日本人は欧州などの大陸と違い、多民族の侵攻や混住生活などがなく、先祖伝来同じ共同体で暮らしてきた。人々は、誰もが仲良く暮らすことを心がけてきた。こういっていいから、見知らぬ人とほんの少しあいさつを交わしただけでも、その人との人生の縁を感じとり、親近感を持つようになるのだ。

今回取材した人たちは、それぞれ縁あつてつなが

り、共に復興への道のりを歩んでいる。苦しんでいるときやつらいときに人を助けられるのは、モノや金ではなく人のつながり。だから支援する人たちは、寄り添い続けている。

被災した人たちは、日常を取り戻せている人も増えている反面、まだまだ困難な状況の中、長い道のりを覚悟し、頑張っている人がたくさんいる。共に寄り添う気持ちが大切だ。

沿岸部と内陸は、遠い昔から共に歩んできています。沿岸部は海の幸を、内陸は山の幸、山の幸をそれぞれ提供してきた。また、お互いの地域に嫁いだり、学校や職場に通ったりと、結びつきは非常に強い。どちらかが欠けていけば、現在の姿はない。沿岸部と内陸は一体なのだ。

復興は、建物や生活環境だけではなく、心が元気になるってこそ。登米市の復興は、沿岸部が心の復興を果たしたとき。みんなが心から笑えるその日まで、被災者の心の「そば」に寄り添うことを忘れずにいたい。